

諫早市飯盛地区

11

地域共生助け合い隊

人口 6961人

世帯数 2851世帯

設立 平成30年9月

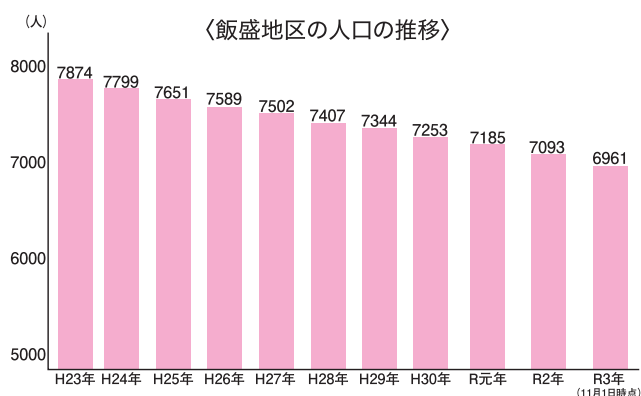
(令和3年11月1日現在)

地域の現状と課題

平成17年に旧諫早市外4町(多良見町、森山町、高来町、小長井町)と合併した諫早市飯盛町は、飯盛山をシンボルに南部には橘湾が広がり、1年を通して温暖な気候に恵まれています。圃場整備が進んでいる畑作地帯では、ジャガイモやニンジンが栽培され、県内でも有数の生産量を誇っています。丘陵地のビニールハウス群では、キクやカーネーションなど花き栽培なども盛んに行われています。県内でも規模の大きい人工海水浴場である「結の浜マリパーク」は夏場を中心に約3万5千人の人出で賑わいます。県指定無形民俗文化財である「田結浮立」などの伝統芸能をはじめ江ノ浦、池下ペーロンなどが受け継がれ、住民同士の絆づくりに積極的な地域です。

長崎市と隣接し交通アクセスなどの利便性も高いことから、子育て世代も比較的多い地域ですが、近年は人口減少や高齢化が進んでいます。平成24年(11月時点)の人口は7799人、65歳以上の高齢者の割合は27.3%でしたが、令和3年(同)は6961人、同35.5%と、この10年間で約800人減り、高齢者の割合も約10ポイント上昇しました。諫早市全体の65歳以上の割合(令和3年11月時点で30.7%)と比べても、市内でも高齢化が先行して進んでいる地域といえます。こうした状況を受け、住民同士が協力して高齢者らの困り事を解決するボランティア団体として発足したのが「地域共生助け合い隊」です。

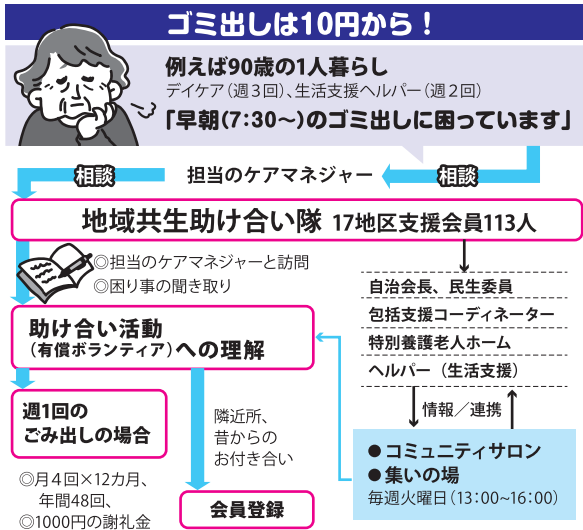
〈拡大図〉



国道251号線沿いに広がる飯盛町の街並み=令和3年12月、諫早市飯盛町



圃場整備された広大な畑作地帯=令和3年12月、諫早市飯盛町



- 地域共生助け合い隊 活動の手順
- 1 依頼者から電話を受ける
 - 2 依頼者宅に訪問し依頼内容を聞く
 - 3 有償ボランティアの説明をする
 - 4 地区担当者に連絡する(担い手の確保)
 - 5 作業日程と人数の確認をする
 - 6 依頼内容に応じて作業をする(時間厳守)
 - 7 終了後、内容確認を受け取る
 - 8 謝礼金をいただき、領収書を渡す(500円×1時間×人数)
 - 9 担当責任者は活動記録を事務局へ提出

現在の主な活動内容

地域共生助け合い隊は、市民が飯盛地区の特色を生かして積極的に地域づくりに取り組むために設置された、飯盛地域づくり協議会の関連組織として活動しています。

発足に当たり町内の高齢者ら約300人に対するアンケートを行い、ごみ出しや話し相手、墓掃除など、具体的にどのような困り事やニーズがあるのかを把握しながら「助け合い」の体制を徐々に整えてきました。

メンバーは、40~80代の113人(令和3年11月時点)で、高齢者や一人暮らし、障害者

の突然の困り事や、事前に登録した利用者にごみ出しや買い物代行、病院への付き添いなどの支援を有償(原則1時間500円。ごみ出しは10円から)で提供しています。子育て世代を支えるために、緊急時の見守りや一時預かりも行っています。自治会や民生委員、特別養護老人ホーム、地区の地域包括支援センターと連携し、情報交換や介護などをテーマにした勉強会も定期的に開催しています。

令和元年6月には町内の「いいもりコミュニティ会館」に交流拠点「コミュニティサロン」を開設し、毎週火曜日、サロン形式で住民がコーヒーを飲みながら気軽に語らえる場を提供しています。

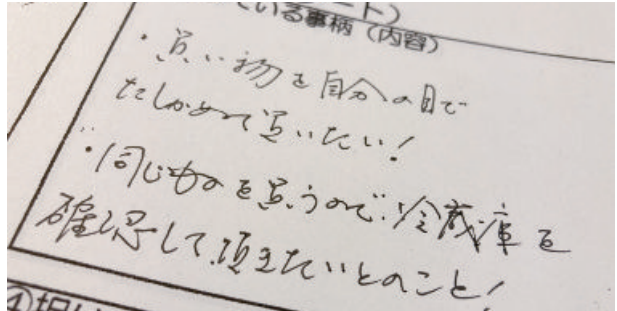
〈「助け合い」の取組〉

地域住民から困り事の相談が地域共生助け合い隊に寄せられると、内容や住民の居住区に応じて派遣する隊員を検討します。しかし、活動当初は、実際に相談者宅を訪ねてみると、同居家族がいたり、親戚が近くに住んでいたりして支援が足りているとみられる相談も相次いでいたため、支援の線引きをすることが必要でした。そこで、連絡を受けると担当者が直接訪問、面談を通して支援の可否を判断することで、必要な人に必要な支援を届ける仕組みを整えていきました。

隊の活動には支える側と支えられる側の双方が「対等」という考え方が根本にあります。そ



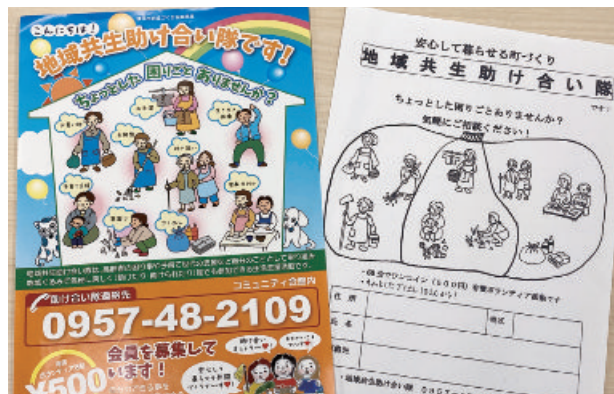
いいもりコミュニティ会館内で運営しているコミュニティサロン
=令和元年10月、諫早市飯盛町



高齢者の困り事を聞き取ったヒアリングシート

の象徴が「有償ボランティア」というルールです。活動当初は地域住民から「高齢者からお金を取るのはどうか」といった非難の声もありましたが、実際に支援を受ける依頼者の声を聞くと「お金を払うのでお願いしやすい」という歓迎の声が大半でした。活動を周知するチラシを配ったり、自治会や老人会などにも出向きながら活動の趣旨や内容を地域に丁寧に伝え続けることで、地域の目も少しずつ変わっていきま

した。
 本当に支援が必要な人に、必要な支援を的確に届ける工夫。そして、お互いが平等な関係で感謝の気持ちを「有償」という形で伝え合うことが活動を継続できる源になっています。



活動を周知するチラシ

POINT

- ・本当に支援が必要か見極める
- ・有償ボランティアは「対等」の証し
- ・活動を周知して地域の理解を深める

INTERVIEW

理解広げ地域の絆を太く

令和2年10月から活動しています。自宅近くの高齢者を自家用車に乗せて、近くのスーパーへ買い物の付き添いをしたり、病院への送迎をしたりしています。私がボランティアをしていることは、近所にすぐに伝わるものです。地域で声を掛けられる機会が増え、顔は知っているけれど、話をすることがなかった人と親しくなり、必要としてもらうことにやりがいを感じます。

高齢者は支援者がどういう人な



地域共生助け合い隊 メンバー
 下釜 幸好さん

のかに敏感です。だからこそ「ご近所さん」に安心感を覚え、気軽に相談をしてくれるのです。ただ自分の用事が生じた場合、相談に応えることができないケースもあります。代わりになるボランティアがもっといてくれば、と感じることもあります。「できる時に、できる範囲で」という関わり方ならば、参加するハードルも下がるはず。多くの人に理解を広げ、地域の絆をより太くしていきたいです。

行政からの支援

諫早市は合併旧町などの地域活性化活動を支援するために「諫早市地域づくり協働事業交付金」を交付しています。地域共生助け合い隊の母体団体「飯盛地域づくり協議会」も交付対象で、令和3年度は協議会を通じて隊の予算として10万円が交付されました。また、隊の事務所や「コミュニティサロン」開催のために、市が管理する「いいもりコミュニティ会館」を有償で提供しています。



市が管理する「いいもりコミュニティ会館」。コミュニティサロン等の活動を実施している＝令和3年12月、諫早市飯盛町

今後の課題・展望

地域共生助け合い隊への相談件数は平成30年度の18件から、令和2年度は142件と地域住民への周知や活動への理解が進むにつれて年々増えています。支援内容も買い物の同行、草取り、病院送迎、墓参り、庭掃除など多岐にわたり、高齢化の加速に伴い、支援ニーズに応じた手厚い支援体制をどう築いていくかが課題です。

車を必要とする活動には支援者は自家用車を使用していますが事故のリスクやガソリン代の負担などが課題でした。そうした中、活動をサポー

トする動きも出てきており、地元の特別養護老人ホームが送迎車を貸し出して、自動車保険代やガソリン代などを施設が負担するなど、住民にとどまらない連携が広がっています。



買い物の付き添い支援をするメンバー(右)
=令和3年10月、諫早市飯盛町

INTERVIEW

「見守ってくれる」安心感を

核家族化や高齢化が進む飯盛地域では、介護が必要なほどではないけれど、自由に体が動かない高齢者が増えています。年を取ると、ごみ出しや草むしりなど、若いころは当たり前だったことが困難になります。自分の足では歩けるけど、遠くには行けない人や、軽度の認知症ながら体は元気な人がいて、そうした狭間にいる人が、地域で「助けて」と言える環境が必要です。「見守ってくれる」という安心感



地域共生助け合い隊 会長
藤本 八重子さん

を身近に感じることができる「お互いさま」が当たり前の地域をつくりたい。その一心で活動を続けています。私たちが支援できない部分は、行政や福祉のプロにバトンタッチしながら、ネットワークを広げていくことも大切です。互助の精神で、人のために活躍する高齢者の姿を子育て世代や孫世代につなげたい。今の子どもが親になるとき、温かいまちができることを願っています。

まとめ

- ① 本当に支援が必要か見極める
- ② 有償ボランティアは「対等」の証し
- ③ 活動を周知して地域の理解を深める
- ④ 支える側と支えられる側が「対等」な関係
- ⑤ 住民にとどまらない助け合いの連携の拡大
- ⑥ 「お互いさま」の精神で活動

取材を経て

活動では、支える人、支えられる人との垣根を取り除くためのさまざまな取り組みが印象的でした。特に、「有償ボランティア」として住民に理解を求めながら、定着を図っているのが大きな特徴です。「お互いさま」の精神で、地域で無理なく、気兼ねなく、助け合う活動を進めるためには、無料でも有料でもない、心ばかりの謝

金としての有償ボランティアだからこそ、多くの住民に活動が理解され長く継続できる秘訣だと感じます。行政サービスなどの「公助」と市民自身で解決する「自助」には限りがあります。その二つの間の「共助」こそが、地域共生助け合い隊の活動です。「見守ってますよ」という思いと、「元気に暮らしている」という発信が気兼ねなくできる居場所が地域を支えるためには必要だと感じます。